

平成 29 年度「小学校教員理科研修」レポート

京都造形芸術大学

アート・コミュニケーション研究センター 研究員

青山 真樹

京都大学と京都府教育委員会の連携事業である小学校教員理科研修が、7月26日(水)～28日(金)の三日間、京都大学総合博物館や花山天文台を会場に開催され、13名の小学校理科教諭と三重県立博物館職員2名が参加した。このレポートでは、本研究センター所長の福のり子教授が講師として登壇した二日目(7月27日)の講義の様子を紹介する。

研修プログラム二日目の午前、「『みる』ことから始まる『発見』、そして『コミュニケーション』」と題された本講義は、福の「芸術も科学も、人と、その人が生きる世界の不思議に取り組もうとしているという点では同じ」という言葉で始まった。さらに、理科と図画工作の学習指導要領を参照しながら、美術が「知的探究心を刺激し、目的意識をもった観察力を養う」という理科の目的と相似しているとし、「みる(観察)」と「発見」そして「コミュニケーション」という要素が両教科における重要な共通項であることを指摘。一般的に異なる分野だと考えられている理科と美術の根底を「=(イコール)」で結んだ。

続けて福は、美術教育の現場における様々な実例や、今日もなお書き換えられ続けている美術史に触れながら、これまでに行われてきた知識型の教育の問題点に言及する。その中で「単に『みえているもの』を、意識的に『みているもの』にする」「知識よりも、意識を持ってみる」ことこそが重要であるとし、知識や情報はその経験を促進するために活用されるべきだと語った。

また、「アート作品=もの」「アート=作品とみる人の間に起こる不思議な現象、深淵で興味深いコミュニケーション」であると位置づけ、そこに固定された唯一の正解はないのだと提示する。その上で「わからなさが、学習やコミュニケーションへの意欲を駆り立てる」、つまり、ひとつの到達点を設定してしまうのではなく「さまざまな解釈」そして「訂正」が繰り返される中でこそ、学びやコミュニケーションは先に進められるのだと説いた。

講義後半では、「みる」とは一体どういうことなのかをさらに掘り下げていく。まずは、私たちが普段いかに「みたいものをみたいようにみている(あるいは、みていない)」のかという点を指摘する。そして「アートとは、そこに存在しないものを、そこにみること」であり、だからこそアート作品に価値を付加していける、私たち鑑賞者の存在が不可欠なのだ続けた。さらに、鑑賞者育成の取り組みのひとつとして京都造形芸術大学 ASP 学科で行

なわれている対話型鑑賞プログラム「ACOP」を紹介。ナビゲーターと鑑賞者たちによるやり取りや、プログラムを経験した学生たちの言葉を例に挙げ、主体的な鑑賞やコミュニケーションを経験する中で、中央教育審議会が提唱する「生きる力」を獲得していることを提示した。

それまでの話を踏まえ、最後にスクリーンに映し出されたのは、Ai（人工知能）を東大受験に合格させようというプロジェクトについて書かれた朝日新聞の記事だ。そこには、Aiの進歩が目覚ましい中、これから私たち人間に求められるのは「正しい答え」を導き出す力ではなく「意味を考える」力なのだと書かれている。これこそが、鑑賞やコミュニケーションを通して育まれる「正解のない問い」に取り組む力なのではないだろうか。福は、生徒たちが「正解のない問い」に能動的に取り組み、「？（疑問）」「！（発見）」の連鎖が常に起こっている、そんな教育現場を目指してほしいと受講者たちにエールを送り、この日のレクチャーを締めくくった。